

「避難訓練」の先にある学び

～アンケートに代えて～

2021・11・6 重枝 一郎

先日、避難訓練を実施した。担当の平野生徒指導部主任、お疲れさまでした。実施アンケートを職員からとるとのことだったので、それに代えて今回は書く。

多くの学校では避難訓練をはじめとする防災教育を長年行っているが、その形骸化をどう防ぐかを課題にしているところは多い。地震などの自然災害はいつ、どこで発生するかわからない中で、生徒に危機的な状況を生き抜く力を十分育てることができているか疑問である。

防災教育の本来の目的は想定外の状況が起きても、自分の命を守るために、主体的に判断して行動する姿勢と力を生徒一人一人に確実に育むことになる。しかしながら、どんな力をつけさせるかというより、知識を機械的に教えたり、マニュアルに沿った予定調和的な避難訓練が行われたりすることが多い気がする。

東日本大震災で甚大な被害を受けた釜石市の小中学生は、その時が放課後の時間帯にもかかわらず99.8%が津波の難を逃れ、「釜石の奇跡」と言われた。小1の子どもが自宅に一人でいたケースもあったと聞く。その子どもは自分の判断で必死に高台へ逃げて助かった。私たちの防災教育はそうした力（判断力・行動力）を育てるものになっているだろうか。被害にあった感度の高い地域の学校は当然防災教育に力を入れる。ただ多くの学校は「防災教育を行う時間の捻出が難しい」といった声を聞く。だから、社会科の授業で川の流れと土地の変化を観察したり、数学科の授業で津波の速さを計算したりなどの工夫も聞く。だがそれはあくまで教員個人の取組になる。

これからの防災教育は、自然の恵みと災いの二面性を伝え、いざというときに生き延びる力を育むことが大切だと言われている。災いだけだとそんな危険なところに住みたくないというマイナスイメージが植えつけられる。だから防災教育には、地域理解、郷土愛、他者への思いやり、命の教育など総合的に多面的に生徒の内発性に働きかける側面をもたなくてはならない。そうすると防災教育を通して、非認知能力の向上につながる。それが生徒の成長を促し、生徒指導上の問題を解決したり、学習意欲が高まったりする。また、防災教育は自治体や地域と連携することが重要である。自治体によってはその連携を実現しやすくするために防災教育コーディネーターが配置されているところもある。本校の生徒たちは様々な地域から集まっている。それぞれの地域性はあると思うが、学校としては先に書いたように、自分の命を守るために主体的に判断し行動する姿勢と力をつけていくことを本質として考えたい。

今回の避難訓練の際、私は『「お母さんが迎えに来るから」と逃げずに親を待とうする子どもがいた。「あなたが一人で逃げる力があれば、親は危険を冒してまで来なくていい。あなたが生き抜く力をつけることは家族の命を救う」という話をした。これは生徒に対して、「自分で判断する力がついているか」という問いのつもりである。そして、日常の学校生活での様々な場面で、そのことを自問自答できているかということである。